

文 化

の1人になったのは、2009年5月にOSKから電話をもらったことによる。

劇団は私が04年に立ち上げたOSK応援ブログに目を留め、連絡してきたという。ただ、電話では面会を求められただけで内容は告げられず、「ブログへの苦情かもしれない」との不安を抱いて大阪市内の待ち合わせ場所に向かった。

OSKの職員は挨拶を終えると、「ホームページを刷新することになり、劇団の沿革の執筆で協力をお願いしたい。90周年誌にも携わって欲しい」。予想だにしない話に驚いたが、受けることにした。OSKは運営主体が幾度も変わった関係などから、歴史をきちんと語れる人がいないと感じていた一方、

来、OSKには「なぜそうなの」と感じさせられることが多かったからだ。

♡ ♪ ♡

パラル回す演出の訳面白いと思えるエピソードを幾つか記そう。まず、30年に初めて披露された劇団歌「桜咲く園」。

私には「自分なりに調べてきた」との自負があった。

90周年誌を担当すれば様々な資料を見せてもらいやすくなるのも魅力だった。1988年5月に奈良市にあった「あやめ池田型大劇場」で見えて以

る。時節に合わせてのことだったが、改作版は同劇団の東京の姉妹劇団「松竹少女歌劇団」(後のSKD)だけで用いられた。OSKで歌われた形跡がない。東京に比べて大阪は当局の目が届きにくかったからできたこと

日深夜の大阪大空襲で外郭を残すのみとなった拠点の大阪劇場が突貫工事で修復され、7月26日に「夏まつり」公演の初日を迎えたのには驚いた。「国民から娯楽を奪うとかえって士気の低下を招く」との判断から公演が認められたいが、空襲警報が鳴ると観客ともども避難し、爆撃が終わると再開という形でよく舞台に立ったものだ。

戦後には目を移すと、劇団員の1人が化粧の仕方であたり、劇団員だった望月まり子さんや大阪の文化に詳しい肥田晴三さんにお話を聞いたり資料を貸してもらったりの協力を得た。公演に居合わせた元劇団員に無理を承知をお願いし、突撃取材もした。そしてOSKが何度か苦難を乗り越えて創設90年を迎えられた訳が私なりに分かった。ひとえに劇団員の舞台にかける情熱・心たむぎさだ。私がOSKに引かれた理由でもある。(おかもとすみ 高校教諭)

OSKの軌跡追っかけ

◇ 歌劇団創立90周年、一ファンが記念誌執筆に参加 ◇

岡本 澄



女性だけが構成メンバーの「OSK日本歌劇団」は今年、創立90周年を迎えた。過去をひもとくと時代を映すエピソードに事欠かない。劇団歌「桜咲く園」にしても、戦時中に改変された歌詞がある。OSKの90周年誌の執筆陣に加わった私は様々な資料に当たったが、「へえー」と思われることが多く、興味が尽きない。

♡ ♪ ♡

運営主体が転々
私は大阪府下で高校教諭として働きながら、1ファンとしてOSKを四半世紀見続けてきた。その私が90周年誌の執筆者

1939年の第14回「春のおどり」(公演。パンフレットから)



歌詞は大阪の川柳作家・岸本水府の作。劇団員が手にしたパラルをくるくる回しながら歌う演出は、前年の29年にフランスから招いた女性歌手が舞台で花吹雪を吸い込んで声を途切れさせ、対策としてパラルをさしたのがそもそもと伝わる。

ここまではある程度知られているが、実は戦時中に岸本自身が歌詞の一部を「桜吹雪に叫べ万歳」と書き換えたものがあ

なのだろうか。また、この曲の歌詞が1番や2番と照らして3番の趣が違うのが気になって調べてみると、3番だけ50年代初頭に作られたらしいと分かった。だが、作詞の経緯は判然としないままだ。

戦時下は、45年3月13

戦争体験も舞台の糧に
ただ、戦時下の苦しい体験には糧にできたこともあったようだ。洋物の禁止で日本物だけを舞台にかけねばならない時代。劇場数が減り、歌舞伎と調整して舞台を使った結果、役者の所作を間近に見ることができ、洋物に比べて苦手としていた日本物の技量が格段に上がったという。このことは、戦前から戦後のOSKを菅原千津子と共に引っ張った秋月恵美子の思い出に記してある。